教育はもっとも現実的なもの

教育は、「親がその体験を子ともに伝える」という原点に帰って考えると、「教育はかくあらねばならぬ」というような、今、盛んに学者や教育者によって論ぜられている理想論・抽象論は、論としてどんなに立派なものであろうとも、所詮は“絵に書いた餅”である。

教育とは、もっと現実的なものである。孔子の弟子たちが、孔子に対して同じ質問を発しているが、その答えは人によって異なっている。はなはだしい場合には、全く正反対の答えさえしている。教育とは、そういうものなのだ。

ところが、教育研究会などに出席してみると、幼児や児童・生徒を指導した経験など全く持たない大学の教師が、幼稚園や小・中学校の教師たちにその指導法を論じているのをよく見かける。そこでは、幼・小・中学の教師が、児童生徒に対する具体的な指導について大学の教師に質問し、大学の教師がそれに答えている。質問する方もする方だが、答える方もよく答えるものだと、ただあきれるばかりである。

ただ一度だけ、「そういう具体的な問題については私は全く経験がないのでわかりません。むしろあなたの方が私よりも解決できる立場にあります。私の方があなたに教えてもらいたい」と答えた大学教授を見たことがある。

それが当然のことだが、わが国の教育界には、「事実よりも理論を尊ぶ」という、まことに奇妙な傾向があり、また、「幼・小・中・高・大学と、上になるほど、先生の方も偉いものである（つまり、何でも知っている）」という、これまた奇妙な傾向がある。

だから、自分でなければ解決できないはずの問題でも、ただ相手が著名な大学教授だということで質問する問題には全く無力なのに、質問して教えを乞うのである。

また、質問を受けた大学教授の方も、幼・小・中学の先生に「知らない」と答えるのは大学教授として恥辱と思うのか（勿論、少しも恥ではないのであるが）、自信あり気に答える者が多い。

こんな有様であるから、現代の教育界には進歩がないのが当然であり病弊に取りつかれるのである。